

航空貨物の取扱量が急増

仕事の関係上、沖縄には毎年のように行く機会がある。基地問題で報道されることが多い沖縄だが、経済についても大きな変化が見られる。グローバル化の波に乗って、経済が活性化しているのだ。中国や台湾からは多くの観光客が沖縄に来る。那覇空港には、台北、ソウル、上海といった所から、旧来の定期便に加えて、多くのLCC(格安航空)が参入している。安いチケットだと、1万円台で台北と往復する便もあるという。こうした便をもっと受け入れたいというところもあり、那覇空港には新

伊藤 元重

構造機大東大教授
開発機大東大教授
研究機大東大教授
総務機大東大教授

たな滑走路をつくることになった。

那覇市内にある波止場には、何千人という収容が可能な巨大なクルーズ船が停泊していた。上海から那覇を経由して九州に行くという。クルーズ船の客は大挙して那覇市内に繰り出し、買い物に回るといふ。電気製品、紙おむ

活性化する沖縄の経済

以前この欄で紹介したが、全日空は那覇空港を拠点に、アジアの五つの空港に毎日貨物専用機を飛ばしている。その結果、開始から2年で那覇空港の航空貨物の取扱量は140倍となり、中部国際空港を抜いて、日本3位の規模となった。 当時はアジア5カ所だった貨物

つ、粉ミルク、化粧品など、あらゆるものを購入するという。観光が地域活性化にいかに関与しているのか、沖縄の例を見れば明らかだ。 沖縄が取り組むグローバル戦略で、静岡にも影響の大きなものが、那覇空港を活用した物流である。

便は、その後8カ所に拡大するようになった。那覇から香港への飛行時間は、那覇から東京への飛行時間よりも短い。地の利を生かして、ヤマト運輸などの物流業者も積極的に参入している。

静岡からも専用便利利用をこうした動きを見ていると、グローバル化はもはや、国と国の関係というよりは、地域と地域、つまりローカル・トゥー・ローカルの関係になりつつあるということがよく分かる。日本がアジアに何

を売ることという時代ではない。沖縄が香港に何を売ることか、あるいは北海道が台湾に何を売ることかという時代であるのだ。 さて静岡であるが、北海道と同じような取り組みを沖縄と展開することが可能なはずだ。静岡空港から沖縄空港にまで持つていけば、その先は毎日8カ所に飛んでいる貨物専用機を利用できる。静岡にも優れた素材はたくさんある。その一部は沖縄で加工することで、消費地との距離を縮めることもできる。

*この記事は静岡新聞社編集局調査部の許諾を得て転載しています。